

監修 吉川幸次郎

朝日新聞社

新訂 中国古典選

唐詩選 上

高木正一

著者略歴

1912年大阪に生まる

京都大学文学部卒業

現在立命館大学文学部教授

新訂・中国古典選 第14巻

唐詩選 上

定価 650 円

発行 昭和40年11月1日 第1刷

著者 高木正一

発行者 朝日新聞社 足田輝一

発行所 東京 名古屋 朝日新聞社
大阪 北九州
印刷 内外印刷 製本 古川製本

© 高木正一 1965 装幀 原 弘

解題

中国の詩が、歌謡の次元から独立し、知識人の心情告白の文芸様式として完成したのは、三世紀、漢末から魏にかけての時代である。自後、数世紀にわたる六朝時代に、詩の文学は、各時代の歴史や社会を背景に、豊かな伝統を形成しつつ、さまざまな展開をくりひろげたが、それが内容・形式ともにみごとな成熟をとげ、発達の絶頂へと到達したのは、八世紀半ばにあたる盛唐の時期であり、これを中心とする前後三百年間の唐代こそは、まさに詩の黄金時代ともいうべき時期であった。

これに続く宋代の詩人は、唐人がおさめたこの成果を継承しながら、新しい展開を試みるなかで、唐詩とは全く地色を異にする宋詩の世界をきずきあげた。その違いを一言にいいあらわすことはむずかしいが、唐詩がはなはだ格調的であるのにたいして、宋詩は散文的かつ理智的である。今少し言葉をかえていえば、唐詩が悲哀を高揚しつつ、熱情的に歌われるのに比べて、宋詩はむしろ悲哀を止揚して、より平静に歌われる。というように、両者の詩風は、はなはだ対蹠的であるが、いずれ劣らぬ鮮かな特色を、それぞれに発揮した。

この相異なった二つの詩風のうち、いずれを詩の典型として祖述するかが、宋代のあとをつぐ元・明の詩人たちにとっての大きな課題となった。時にその方向を決定する早い指針ともなったものは、南宋末、げんろう 嚴羽の「滄浪そうろう」

「詩話」の議論である。すなわち、盛唐こそが詩の絶頂であり、これを祖述するのが最も望ましいことを強調する提唱であった。これは、宋の詩風が、その政治とともに終焉に近づいたころ、民間人を主とする小詩人たちの集団に流れていた唐詩への郷愁、愛好を契機としておこった先駆的な議論である。

この議論をより強烈に主張して、明代の詩論を規制するとともに、盛唐詩祖述の方向を確定したものに、明初の高棅の「唐詩品彙」九十巻がある。これは、唐詩の歴史を、初、盛、中、晩唐の四期に区分し、且つこの時代の区分がすなわち価値の序列であるとするもの、いいかえれば、唐の詩は、初唐から盛唐へと登りつめて、中、晩唐は下降の時代であるという評価を、五千数百首の詩によって実証したものである。

こうして盛唐の詩を、唐詩の絶頂とする認識が日々に深まっていく中で、十六世紀、明の中葉から、「古文辞」とよばれる強烈な古典主義文学運動がおこって、世の中を風靡した。「文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐」。それ以外の過去の文学は邪道として排撃する、極端な古典主義の文学運動である。その主宰者となったものは、世紀の前半では、李夢陽・何景明らのいわゆる「前七子」、後半では、李攀竜、王世貞ら「後七子」の詩人たちであるが、ことに十六世紀後半の詩壇を完全に制圧したのは、李攀竜一派の人々であった。彼等の主宰するこの運動は、簡易、率直、強烈を欲する時代精神を満足させるものとして、ひろい階層の人々から大きな支持と歓迎をうけ、燎原の火のごとくもえさかりながら、この世紀をおおいつくした。

「唐詩選」七巻は、その李攀竜（一五一四—一五七〇）、字は子鱗が、詩を学ぶものの手引きとすべく、一家の見識をもって編集したといわれる、唐詩の選集である。選録するところの詩は、すべて四百六十五首。これを五言古詩、七言古詩、五言律詩、五言排律、七言律詩、五言絶句、七言絶句という順序で、詩体別に排列する。

作家の数でいえば、全部で百二十八人。うち最も多くの作品が選ばれているのは、杜甫の五十一首であり、これを筆頭に、李白の三十三首、王維の三十一首、岑参（せんしん）の二十八首というように、盛唐詩に重点がおかれていることは、「古文辞」をもって立つ彼の主張通りである。それにまた、中晚唐詩が軽くあしらわれる中で、代表的な詩人である韓愈がわずかに一首、李商隠は三首。白居易、杜牧にいたっては全く無視されているという極端な偏向も、格調を重視する彼の立場からみれば、あながち不思議なことではなく、むしろ一つの見識を示すものとさえ言いえよう。かくして編纂されたこの書物は、李攀竜の没後まもないころ世にあらわれ、彼の盛名を負って大きな権威をもち、広い読者層を獲得した。

ところが、世紀もあらたまった十七世紀のはじめ明末清初に至って、「古文辞」の文学運動が、そのもつ無理と弊害のゆえに、はげしい批判、不評を受けながら没落するようになると、「唐詩選」そのものにも疑惑の目がむけられ、やがては、清の乾隆年間に勅撰された「四庫全書総目提要」によって、この書物が、李攀竜の名をかたる、まっかなにせものであることが明らかにされた。それによれば、彼が歴代の詩を選んで作っておいた「古今詩刪（こんしんし）」のうち、唐の部分からその一部をぬきとり、李攀竜の文集中にある「選唐詩序」を「唐詩選序」と書きなおして、冒頭につけ、どこかの本屋が金儲けのために出版したものだという。あるいはまた、「唐詩選」にあつて「古今詩刪」にない十九首の詩、これを含めた四百六十五首のすべてが、李攀竜一派の詩人、唐汝詢（とうじよん）の「唐詩解」に収録されているというような事実から、この書物は唐氏の「唐詩解」をダイジェストして作った上に、盛名高い李攀竜の名をこっそり盗用したものだともいう。いずれにしても、この書物が李氏の原編でないことは事実であろう。しかし、これが彼の主張にそう編纂物であることは否定できない。それにまた、これが偽書

だからといって、ここに選録されている唐詩そのものの価値までが減少するということではない。それどころか、古文辞派ごのみの偏向はあるにしても、唐詩の最も簡便且つすぐれた選集として、その価値はなお重視されてよいであらう。

話かわって、この書物がわが国に伝わり、中国で失った評価を挽回したのは、江戸時代中期である。正徳の初め（一七一）から天明の末（一七八八）にいたる十八世紀の約八十年間は、わが国の漢文学が俄然盛況を呈した時期であり、新井白石、荻生徂徠の二大家がならび出て、わが国の漢文学を大きく一転回せしめた。その転回とは、こと詩の創作鑑賞に關していえば、宋詩の風格を学んできた五山文学の伝統をくつがえし、詩は必ず盛唐をもって規範とすべしという、明の「古文辞」繼承へのくらがえであった。特に徂徠は、李攀竜と王世貞を崇拜し、いわゆる「古文辞学」を首唱した碩学であり、その影響力には大きなものがあつた。その結果、五山以来、久しく漢文学の教科書として使用されてきた「三体詩」、「古文真宝」などの書物が排斥され、それにかわって、「唐詩選」が新たな評価を受けて登場した。たまたま、徂徠の弟子に服部南郭はつとりなんかくなるものがあり、享保九年（一七二四）、この書物を覆刻して世に紹介すると、たちまち当時のベスト・セラーとなって、多くの人々に愛読された。

やがて、十八世紀末から十九世紀初めのころにかけ、さしも隆盛をきわめた徂徠一派の古典主義が凋落しはじめると、市河寛斎、山本北山など、古典主義に叛旗をひるがえした学者、詩人が現われ、「唐詩選」が偽書であることを指摘して、徂徠や南郭の不明を攻撃した。しかし、この書物の流行には、大きな影響を及ぼすにはいたらず、それ以後も、長くわが国民の間に愛読されて、漢文学鑑賞のよき入門書としての役割をはたしてきた。い

きおい、これが注釈書も、江戸時代以後現在にいたるまでに、かずかずのものが刊行されている。参考のため、その主なものを左に列記しておく。

江戸時代

唐詩句解七卷

入江忠固（南溟）

唐詩選国字解七卷

服部元喬（南郭）

唐詩選箋注八卷余言二卷

戸崎允明（淡園）

唐詩選弁蒙七卷

宇野成之（東山）

唐註集注七卷

釈・顯常（大典）

明治大正時代

唐詩選評釈 上下二冊

森泰次郎（槐南） 文会堂

唐詩選新釈 五冊

久保得二（天随） 博文館

昭和時代

唐詩選詳説 上下二冊

簡野道明 明治書院

唐詩選（岩波文庫） 上中下三冊

前野直彬 岩波書店

唐詩選（新訳漢文大系）

目加田誠 明治書院

目次

まえがき
解題

初唐詩

魏徵

述懷

王績

野望

王勃

滕王閣

送杜少府之任蜀州

蜀中九日

楊炯

從軍行

送劉校書從軍

夜送趙縱

盧照鄰

長安古意

駱賓王

帝京編

七絕
22

五律
20

七古
17

五律
16

五律
12

五古
11

五古
4

五古
3

1

1

七古
52

七古
51

七古
35

七古
34

五絕
32

五排
29

五律
26

五律
25

靈隱寺

五排 77

戲贈_二趙使君美人_一

七絕 122

宿_二溫城_一望_二軍營_一

五排 81

劉庭芝

125

易水送別

五絕 85

公子行

七古 126

李 嶠

長寧公主東莊侍_レ宴_二應制_一

五律 88

張若虛

138

奉_レ和_レ幸_二韋嗣立山莊_一應制

五排 91

春江花月夜

七古 138

蘇味道

96

沈佺期

146

使_二嶺南_一聞_二崔馬二御史_一竝_二拜_二台郎_一

五排 97

酬_二蘇員外味道夏晚寓_二直省中_一見_レ贈

五排 148

杜審言

102

和_二韋舍人早朝_一

五排 151

蓬萊三殿侍_レ宴_二奉_レ勅詠_二終南山_一

五律 103

古 意

七律 155

和_二晉陵陸丞早春遊望_一

五律 105

遙同_二杜員外審言過_二嶺_一

七律 159

和_二康五庭芝望月有懷_一

五律 108

侍_二宴安樂公主新宅_一應制

七律 162

送_二崔融_一

五律 111

龜池篇

七律 165

贈_二蘇味道_一

五排 113

紅樓院應制

七律 168

渡_二湘江_一

七絕 118

再入_二道場_一紀_二事_一應制

七律 171

贈_二蘇綰書_一記

七絕 119

邛 山

七絕 173

宋之問

下_レ山歌

七古

177

汾上驚_レ秋
盧_レ僊

五絕

221

至_二端州_一、見_二杜五審言_一沈_二佺期_一閻五朝

南樓望

五絕

223

隱王_二一無競題_レ壁、慨然成_レ詠

郭_レ震

五絕

225

扈_二從登封_一途中作

子夜春歌

五絕

226

送_二沙門泓景道俊玄奘還_二荊州_一、_二應制

賀知章

五絕

228

奉_レ和_二幸_二長安故城未央宮_一、_二應制

題_二袁氏別業_一

五絕

229

奉_レ和_二晦日幸_二昆明池_一、_二應制

李_レ邕

七律

230

和_二姚給事寓直之作_一

奉_レ和_二初春幸_二太平公主南莊_一、_二應制

七律

231

早發_二始興江口_一至_二虛氏村_一作

韋元旦

七律

234

送_二司馬道士遊_二天台_一

興慶池侍_レ宴、_二應制

七律

235

蘇_レ頊

陳子昂

七律

238

同_レ餞_二陽將軍兼_二原州都督御史中丞_一

薊丘覽古

五古

239

奉_レ和_二初春幸_二太平公主南莊_一、_二應制

春夜別_二友人_一

五律

242

侍_二宴安樂公主新宅_一、_二應制

晚次_二樂鄉_一

五律

244

奉_レ和_二春日幸_二望春宮_一、_二應制

送_二別崔著作東征_一

五律

246

白帝城懷古	五排	250	感遇	五古	290
峴山懷古	五排	253	奉 _レ 和 _二 聖製送 _三 尚書燕國公說赴 _二 朔方軍 _一	五排	292
贈 _二 喬侍御 _一	五絕	258	奉 _レ 和 _二 聖製早度 _二 蒲闥 _一	五排	298
張說		260	和 _三 許給事直夜簡 _二 諸公 _一	五排	301
恩制賜 _二 食於麗正殿書院宴 _一 、賦 _二 得林字 _一	五律	261	酬 _下 趙 _二 一侍御使 _二 西軍 _一 、贈 _二 同省旧寮 _一 之作 _上	五排	305
奉 _レ 和 _二 聖制途經 _二 華岳 _一	五排	265	照 _レ 鏡見 _二 白髮 _一	五絕	310
還至 _二 端州驛 _一 、前与 _二 高六 _一 別処	五律	268	孫逖		311
幽州夜飲	五律	271	宿 _二 雲門寺閣 _一	五律	312
幽州新歲作	七律	274	和 _下 左司張員外自 _レ 洛使入 _レ 京、中路先赴 _二		
澠湖山寺	七律	276	長安 _一 逢 _二 立春日 _一 、贈 _中 韋侍御等諸公 _上	七律	314
遙同 _二 蔡起居偃松篇 _一	七律	280	同 _二 洛陽李少府觀 _二 永樂公主入 _レ 蕃	五絕	317
送 _二 梁六 _一	七絕	283	張敬忠		319
蜀道後 _レ 期	五絕	284	辺詞	七絕	319
賈曾		285	張諤		320
奉 _レ 和 _二 春日出 _レ 苑矚目 _一 、応令	七律	286	九日宴	七絕	321
張九齡		289	劉庭琦		322

崔五丈圖屏風、各賦_二一物、得_二烏孫佩

刀_一

七古
372

望_二秦川_一

五律
376

聖善閣送_二裴迪入_二京_一

五排
377

奉_レ送_二五叔入_二京_一、兼寄_二綦毋_二

五絕
380

寄_二韓鵬_一

七絕
382

李適之

384

罷_レ相作

五絕
384

万_レ楚

386

五日觀_レ妓

七律
386

祖_レ詠

389

江南旅情

五律
389

蘇氏別業

五律
392

清明宴_二司勳劉郎中別業_一

五排
394

望_二薊門_一

七律
397

終南望_二余雪_一

五絕
400

蔡希寂

洛陽客舍逢_二祖詠_一留宴

七絕
401

丁仙芝

403

余杭醉歌、贈_二吳山人_一

七古
403

渡_二揚子江_一

五律
406

崔國輔

409

長信草

五絕
409

少年行

七絕
411

九日

七絕
412

王昌齡

414

城傍曲

七古
415

胡笳曲

五律
417

萬歲樓

七律
419

送_二郭司倉_一

五絕
421

答_二武陵田太守_一

五絕
422

春宮曲

七絕
424

西宮春怨	七絕	426	登 _二 鸛鵲樓 _一	五絕	454
西宮秋怨	七絕	428	涼州詞	七絕	456
長信秋詞	七絕	430	九日送別	七絕	458
青樓曲	七絕	432	崔顥		460
閨怨	七絕	434	孟門行	七古	460
出塞行	七絕	435	黃鶴樓	七律	464
從軍行 一	七絕	437	行經 _二 華陰 _一	七律	467
從軍行 二	七絕	439	長干行	五絕	470
從軍行 三	七絕	440	崔曙		471
梁苑	七絕	442	早發 _二 交崖山 _一 還 _二 太室 _一 作	五古	472
芙蓉樓送 _二 辛漸 _一	七絕	444	九日登 _二 仙台 _一 呈 _二 劉明府 _一 容 _一	七律	475
送 _二 薛大赴 _二 安陸 _一	七絕	446	李 澄		478
送 _二 別魏 _一	七絕	448	奉 _レ 和 _二 聖製從 _二 蓬萊 _一 向 _二 興慶 _一 閣道中留春 _一		
盧溪別 _レ 人	七絕	450	雨中春望之作 _レ 庾制	七律	479
重別 _二 李評事 _一	七絕	452			
王之渙	七絕	454			

初唐詩

文学史という初唐とは、唐の開国から睿宗えいそうの景雲年間まで、つまり七世紀の初めから八世紀の初めにいたる約百年間のことである。この百年間は、途中で、則天武后が一時女帝となって政權をにぎるといふ変則な事態を招きながらも、全体としてみると、歴史は常に上昇の道を辿り、新興国家としてのわかわかしい力に支えられて、その国力が目まじに充実していった時期である。

そうした雰囲気の中にあつて、文学もまた、着々と上昇の道を辿りつつあつた。この時期の文学のいない手となつた者の多くは、皇帝を中心とする宮廷詩壇に所屬する詩人たちであり、彼等の文学は、全体としてなお、南北朝末期の、いわゆる齊梁体の繼續であつた。その作品には、応制詩といつて、宮廷における宴会の席上、勅命に答えて作つたものがはなはだ多い。それらの作品は、内容的には大したものではないが、前代詩人が努力を傾けてきた形式美の完成をより推進した功績は認めてよく、ことに、この期の終りに近い中宗の宮廷詩壇で、從來

なおざりにされていた七言律詩なる新詩形の韻律を、短期間に完成させたことは、注目に値する。

五言律詩の韻律は、これよりさき、初唐の四傑とよばれる王勃・楊炯・盧照鄰・駱賓王のうち、特に王・楊の二人を中心として完成されたが、これらの四人は、いずれも二流の士族出身で、宮廷の詩文の宴につらなる人達ではなく、そのためか、前代文学を継承しつつも、自由な新しい感情を噴出させようとして、その調子は激越となり、用語もまた新鋭、齊梁体の、当時における近代化をおしすすめた。それにまた、盧・駱の二人は、かつては賦の領域であった形式や描写精神を詩の世界にもちこみ、抒情性に富む長篇の七言歌行を成立せしめて、盛唐の杜甫や李白の叙事詩的規模をもつ七言歌行を準備したことも、劃期的な意味をもつ。

なお、この時期で注意すべきは、齊梁体詩風への反ばりが起ったことである。早くして王績がそれであり、隠者としての生活を送るなかで、晉の阮籍や陶淵明を景慕しながら、独立の新しいスタイルをひらいた。また、おかれて出た陳子昂は、立場こそちがえ、五百年をさかのぼった漢魏の詩がもつ風骨を尊び、これへの復帰を首唱して、ますらお振りの詩を作り、詩における復古運動の先駆者的役割をはたした。張九齡もまたその系列に連なる。

さらには、宮廷詩人でありながら、一時中央から追放された時の張説が、流謫の身がなめる人間の悲哀を高揚して、抒情詩の発達をうながすなど、この百年間に、詩の文学は、いろいろと新しい方向をうちだしつつ、次の時代の大きな完成を準備した。その意味で、この時期は文学の過渡期であったといつてよい。